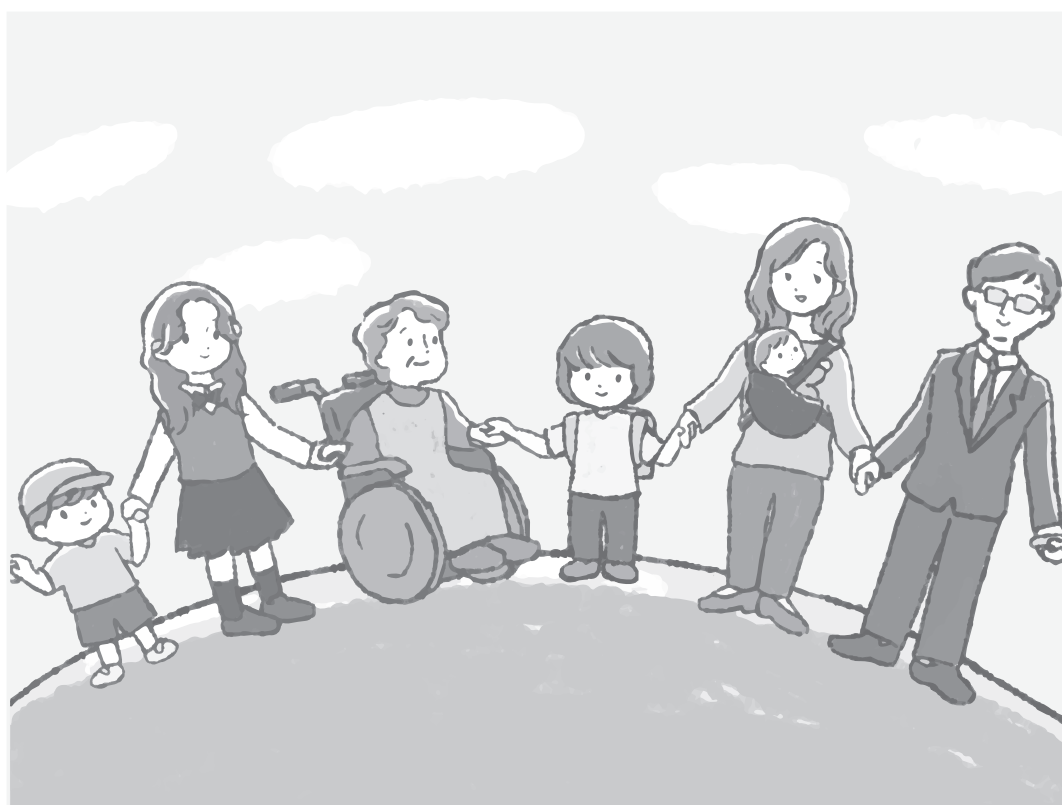


令和7年度  
児童・生徒福祉作文作品集

# 青空



社会福祉  
法人 佐野市社会福祉協議会

## 福祉作文作品集「青空」の発刊によせて

福祉作文作品集「青空」の発刊にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

令和七年度児童・生徒福祉作文募集事業に、1,000編ものご応募をいただきました。誠にありがとうございます。最優秀賞、優秀賞、佳作の入賞作品が選出されました。各賞を受賞された方につきましては、大変おめでとうございます。

今回の福祉作文では、家族や身近な人との関わりや自身の経験、体験を通して、自分が考える福祉について率直に表現された作品が多くみられました。どの作品も自分の思いや考えがしっかりと綴られており、自分たちが作っていくこれからの社会に対する希望や意気込みが感じられる、すばらしい作品でした。

この作品集が大勢の市民の目にとまり、身近な福祉に関心を持つきっかけとなり、優しさとおもいやりの心で互いに助け合うことのできる「福祉のまちづくり」が広がっていくことを切に願います。

むすびに、本事業の実施にあたりまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆様、作品の審査にあたられました皆様、作品を応募していただいた小・中学生の皆さんに心から感謝を申し上げます。

社会福祉法人 佐野市社会福祉協議会

会長 五十畑 正夫

題 名

学 校 名 学 年

氏

名 (敬称略)

頁

最 優 秀 賞

ゆずつてもらった

わたしの考える未来

心のこもったパン

思いやりの行動が福祉の第一歩

優 秀 賞 (小学生の部)

おかあさんのおしごと

やさしいきもち

はじめての手話

ユニバーサルデザインとは

ぼくのひいおばあちゃん

みんなで食べよう 子ども食堂

福祉サービスの大切さ

これから祖母と暮らしていく上で

北 城 旗 赤  
中 小 小 小  
三 五 四 二  
年 年 年 年

関 槇 松 安  
口 嶋 原 田  
サ 珠 し 楓  
ラ 莉 ず 楓  
サ 莉 ず 楓

田 赤 城 あ 犬 犬 葛 あ  
沼 見 北 そ 伏 伏 生 そ  
小 小 小 野 東 東 義 野  
六 六 四 三 三 二 一 義  
年 年 年 年 年 年 年 義

塩 田 高 矢 大 お 芦 川 柿  
島 村 瀬 古 お 矢 岸 沼  
陽 ひ 優 ゆ 陽 ひ 真 ま 萩 し  
咲 さ 衣 い 晴 は 敬 だ 湊 み 樹 い 人 と 斗 と  
さ き い は だ か 湊 み 樹 い 人 と 斗 と

15 14 13 12 10 9 8 7

5 4 2 1

やさしさ

葛生義六年

高實子たかじつこ

泰聖たいせい

16

優秀賞(中学生の部)

色覚障がい

西中一年

藤波ふじなみ

丈士郎じょうじろう

18

寄り添う心

赤見中一年

長沢ながさわ

莉望りぼう

19

幸せな社会を目指して

くマイ・チャレンジ職場体験を通してく

赤見中二年

星野ほしの

いちか

20

障がいのある人も同じ人間

西中三年

鴛海うみ

柚璃ゆうれい

22

「地域を家族に」

葛生義九年

廣瀬ひろせ

友香ゆうか

23

佳作

(題名・学校名・学年・氏名)

25

# 最優秀賞

(小学校一・二年生の部)

## ゆずってもらった

赤見小学校 二年

安田<sup>やすだ</sup>

楓<sup>かえで</sup>

ある夏の日、ぼくはお母さんといっしょに、とうきょうの池ぶくろえきから新じゆく行きのでん車にのりました。とうきょうの町をたくさんあるいたので、ぼくのかおは、まっ赤になっていました。でも、そのときにでん車の中は人がいっぱい、すわる場所がありませんでした。お母さんとドアの近くに立って、つりかわをにぎっていました。

そのとき、先にすわっていた女の人が、「このせきにどうぞすわってください。」と、ぼくとお母さんに声をかけてくれたのかわからなければ、お母さんのかおを見たらうれしそうにわらっていたので、せきにすわることになりました。

すわっていたら、まっ赤なかおがもとの色にもどりました。女の人は、つりかわをつかんで立っていたので、「だいじょうぶかな。つらくないのかな。」と、

しんぱいになりました。まわりの大人の人たちは、だれも気にしていないようでした。

女の人がつぎのえきでおりるとき、ぼくは、

「ありがとうございます。」

と、おれいを言うのと、えがおでえしゃくをしておりて行きました。ぼくは、やさしくされてすぐうれしい気持ちで、ところがほわっとしました。「人にやさしくされることは、こういうことなんだな。」と思いました。

お家で、お母さんが「ふくし」ということを教えてくれました。「ふくし」というのは、年れいやせいべつにかんけいなく、こまっている人をたすけて、みんなが気持ちよくくらするようにすることだと教えてくれました。

そのとき、でん車の中のことを思い出しました。ぼくがしてもらったことは、「ふくし」の一つだったんだと気づきました。

ぼくの学校には、耳がすこしふじゆうなおともだちがいます。ほちようきをつかっています。その子に声をかけるときは、かたをとんとんとしてあい手が気づいてから話すようにしたり、手話を教えてもらってつかったりしています。

そのおともだちは、にこにこわらってお手がみをほくにくれました。お手がみには、「いつもあそんでくれてありがとう。」と、書いてありました。やさしくされると、ぼくもうれしい気もちになるので、そのおともだちもうれしい気もちになるんだと思います。

ぼくは、これからはもつとまわりの人のことをよく見て、こまっっている人がいたら、「大じょうぶ？」と声をかけたり、気づいたりできるようにになりたいです。「ふくし」は、とくべつなことをすることではなくて、やさしさや思いやりから生まれるものだと知りました。これからも、「ありがとう。」と言ってもらえるようになりたいです。



## 最優秀賞

(小学校三・四年生の部)

### わたしの考える未来

旗川小学校 四年 松原 まつばら しずく

わたしのおばあちゃんの家は、山の中にあります。周りには、サルやクマなどの動物がくらしています。動物に注意するよう、よくアナウンスが流れています。そのようなかんきょうの中で、わたしのおばあちゃん生活しています。

おばあちゃんの家近所には、たくさんのおじいさんやおばあさんが住んでいます。みんな元気に過ごしていますが、生活に必要な買い物には困っています。理由は、おじいさんやおばあさんは、家の近くに来た移動はん売のお店に、シルバーカーを押しながらゆっくり歩いて、向かっていたからです。

わたしは、おじいさんやおばあさんのくらしが少し便利になるには、どんなことがあるといいか、おばあちゃんに話を聞いてみました。すると、お店に買い物に行くことができるといいと話してくれました。

わたしは、自分で移動することがむずかしい人たちを、だれかが車でお店につれて行けたらいいなと思いました。今は、デイサービスという場所があると聞きました。みんなが利用できるとは限りません。タクシーを使うという方法もありますが、何度も利用するとかくさんのお金がかかってしまいます。買い物に行きたいときにサポートしてくれる人がいてくれるといいなと思います。

わたしは大人になったら、おじいさんやおばあさんが困っていることを助ける会社をつくりたいです。車を用意して、おじいさんやおばあさんの行きたいところへつれて行きたいです。買い物が必要なときは、お店にいっしょに行つて、お手伝いをしたいです。その後、家まで送り届けます。そして、次の予定を聞いておき、生活のサポートを続けたいです。これを続けていくと、たくさんのおじいさんやおばあさんを助けられると思います。

困っている人を助けたいと考えて、自分の周りを見ると、いろいろなことに気付くことがあります。

お店で買い物をしていたときに、買い物を終えたおじいさんがいました。おじいさんは買った物をふくろに入れるのがとても大変そうでした。だれでもおじい

さんになると細かい動きをするのがむずかしくなるんだなと思いました。その時わたしがすぐに助けることはできなかつたけれど、そんな時にお店の人が手をかしてあげることが当たり前になる未来があるといいなと思います。

おばあちゃんの家に遊びに行つていたときには、つえをついてゆっくり歩いて回らん板を届けに来るおじいさんを見ました。転んだら大変だと思いながら、回らん板を受け取りました。

やりたいことはあるけれど、体が思い通りに動かないから困っている人たちをみんなが助けてくれる未来になつてほしいです。



# 最優秀賞

(小学校五・六年生の部)

## 心のもったパン

城北小学校 五年

榎嶋まきしま

珠莉しゅり

「珠莉ちゃんは、障がいをもった人が作ったパンを食べることにしているところがある？」

夏休み、わたしは母に連れられて障がい者施設内にあるパン屋に行きました。そこは障がいをもった方が働いているそうです。

お店の中にはくまの顔がたくさんかかっているパンなどがあり、どれも美味しそうと思いつながらパンを選びました。「このパンを障がいをもった人が作っているのかな？」わたしは母に聞かれたことを思い出し、会計のときに店員さんにたずねてみました。すると、「施設の職員と利用者が一緒に作っているんだよ。」と答えてくれました。

帰り道、母から障がいをもっている人が作ったというだけでその食べ物を食べたくない人がいるということを知りました。並んでいたパンはどれも美味しそう

だったのに、どうして障がいをもった人が作ったからといって食べたくないのか分かりませんでした。「私たちと少し違う部分があるから？」「障がいをもった人が作ったパンは美味しくないのかな？」と疑問に感じました。

わたしはインターネットで障がい者の作るパンについて調べてみることにしました。すると、「障がい者の作るパン」に関連する言葉に、「捨てる」「食べたくない」という言葉が並んでいて、とてもしょげきを受けました。実際にけんさくされた記事を読んでもみると、「障がい者が作ったパンをもらったら捨てる。」「食べた後にその事を知ったら気持ち悪くなる。」などと書かれていました。一生けん命作っている職員の方や利用者さんのことを考えると、私はとてもショックで悲しい気持ちになりました。

わたしが買ってきたパンは、もちもちとしてとても美味しかったです。また買いに行きたいと思うほどでした。障がいのある・ない関係なく、気持ちをこめて作られたものは美味しいはずですよ。

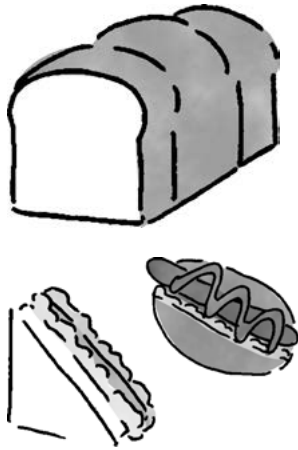
わたしは母とパン屋に行き、障がいをもった方が心をこめて美味しいパンを作っていることを知りました。一方で、そういったものにへん見をもつ人がいること

も知りました。

へん見をもっている人の気持ちを変えることは難しいけれど、一人でも多くの人に、どんな物でも一所けん命、心を込めて作っている人がいることを忘れないでほしいです。そして、作ってくれた方の思いによりそうところが、障がいをもった方やその家族、し設の職員の方々の幸せにつながっていくのではないかと感じました。

わたしはこの夏、お気に入りになったこのパン屋さんに通い続けたいです。また、友達にもすすめたいと思っています。

「みなさんは、障がいをもった人が作ったものを食べることにていこうがありますか？」



## 最優秀賞

(中学生の部)

### 思いやりの行動が福祉の第一歩

北中学校 三年

せきぐち 関口

サラサ

近年、私たちの暮らしの中で「福祉」という言葉を耳にする機会が増えてきました。福祉とは、すべての人が健康で安心して生活できるように支え合う仕組みのことをいいます。高齢者や障がいのある方、子どもひとり親家庭など、さまざまな立場にある人々が、お互いに助け合いながら暮らしていける社会を作るために、福祉活動はとても大切な役割を果たしています。

私は、学校での福祉体験学習や、地域で行われているボランティア活動を通して、福祉について学ぶ機会がありました。たとえば、高齢者施設での訪問活動では、お年寄りの方々とお話をするだけでとても喜んでいただけただけことが印象に残っています。「あなたのような若い人が来てくれてうれしい。」と言われたとき、私たちの存在自体が誰かの力になれるのだと実感しました。また、障がいのある方と接する機会もあり

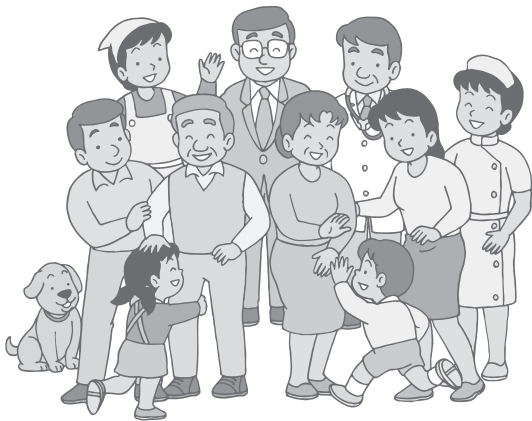
ました。最初は どう接したらいいのか分からず緊張していましたが、話してみると、障がいのある、なしなどには関係なくみんなとても明るく、趣味や好きなことについて楽しく話してくださいました。そのときは、「特別なことをしなくても、相手を理解しようとする気持ちが大切なのだ。」と気づきました。福祉とは、特別な人が行うものではなく、誰もができる「思いやり」から始まるものなのだと思います。

日本はこれから少子高齢化がさらに進み、支援を必要とする人がますます増えていくといわれています。そのような中で、支える側と支えられる側という線をはっきり引いて分けるのではなく、どの人も、みんな支え合う関係を作っていくことが大切だと感じます。「誰かの役に立ちたい」という思いをもつ人が増えれば、社会全体があたたかくなり、困っている人が孤立することも少なくなるのではないのでしょうか。

これからの社会では、福祉の考え方もっと身近なものとして、多くの人が意識することが求められます。学校や家庭、地域など、身の回りのさまざまな場面で福祉について考える機会をもつことです。また、小さな親切や思いやりの行動が、福祉の第一歩になることを忘れてはいけません。たとえば、困っている友だち

に声をかけたり、道に迷っている人を手助けしたりすることも立派な福祉の実践です。私たち一人ひとりができることを見つけて行動することで、社会は少しずつ変わっていくはずですよ。

これからも私は、福祉について学び続け、身の回りの人たちとのつながりを大切にしながら、思いやりの心をもって行動していきたいと思っています。この先、できる限り、ボランティア活動や高齢者福祉施設訪問も行ってみたいです。そういった活動から見えてくるものもきっとあるはずですよ。



## 優 秀 賞 (小学生の部)

### おかあさんのおしごと

あそ野学園義務教育学校

一年

柿沼 かきぬま

萩斗 しろうと

ぼくのおかあさんは、かいごふくししです。かいごふくししは、おとしよりのひとたちのおせわをするおしごとです。おかあさんはまいにち、

「いってきます。」

と行って、しごとばのしせつへでかけます。

あるひ、ぼくはおかあさんといっしょに、おかあさんのしごとばにいきました。そこには、たくさんのおじいさんや、おばあさんがいました。ぼくが、

「こんにちは。」

といたら、おじいさんたちが、にっこりわらって、

「こんにちは。」

と、いってくれました。

おかあさんは、おばあさんのくつしたをはかせたり、ごはんをたべるときのおてつだいをしたりしていました。ぼくは、おかあさんのおしごとをみて、すごいなとおもいました。

おかあさんは、やさしくて、つよくて、かっこいいです。しせつのおばあさんのひとりが、

「おかあさん、やさしいひとだね。いつもたすかっているよ。」

と、ぼくにいってくれました。ぼくは、すこしはずかしかったけれど、うれしかったです。

おかあさんは、

「おじいさんやおばあさんが、わらってすごせるようにするのが、わたしのしごとだよ。」

といていました。ぼくは、そんなおしごとがあるんだとしました。

ちがうひに、ぼくはまたおかあさんのしごとばへいきました。そのときは、おばあさんたちといっしょに、うたをうたいました。たのしくて、みんなわらっていました。

かいごふくししは、たいへんなおしごとだとおもいます。でも、おかあさんはいつも、

「ありがとうっていわれると、うれしいよ。」

といています。それをきいて、ぼくもだれかのやくにたてるようなひとになりたいとおもいました。おかあさんみたいに、やさしくて、つよくて、ひとのことをかんがえられるひとになりたいです。

ふくしというのは、みんなでたすけあって、みんながしあわせにくらせることです。おとしよりだけでなく、こまっているひとがいたら、ぼくもてたすけしたいです。がっこうで、こまっているともだちをみつけたら、こえをかけて、たすけてあげたいです。まちなかで、からだのふじゆうなかななどがこまっているとき、

「おてつだいしましょうか。」

といえたら、かっこいいなとおもいます。

ぼくは、おかあさんがおしごとをしているところをみて、たいせつなことをまなびました。これから、まわりのひとにやさしくして、みんながえがおになれるようにしたいです。

## やさしいきもち

葛生義務教育学校 一年 川岸<sup>かわぎし</sup> 真人<sup>まなと</sup>

ぼくは、「ふくし」ということばについてかんがえたときに、ははのしごとがかいごふくししだったことをおもいだし、ははに、

「どんなしごとをしているの？」

と、きいてみました。すると、ははは、

「かいごふくししのしごとは、からだがふじゆうで、あるけなくてくるまいすだったり、あるけるけど、おふろやごはんがひとりではむずかしいひとのおてつだいをしたりしているの。そのひとらしく、くらせるようにしているのよ。」

といっています。ぼくがさらに、

「そのひとらしくって、どんなこと？」ときくと、

「じぶんとおなじひとはいないの。ぼくがぼくらしく、わたしがわたしらしく、じぶんのきもちをたいせつにすることだよ。」

と、おしえてくれました。

また、ははは、まえにぼくがプレゼントしたアサガオのたねを、ふくししせつでそだててくれて、それがきれいにさいて、しせつのひとたちがみんなにこにこして、よろこんでいたとおしえてくれました。ぼくは、なんだかともうれしいきもちになりました。

おもえば、ほいくえんのときにも、ぼくたちのうんどうかいを、ろうじんホームのおじいちゃんおばあちゃんがおうえんしてくれたり、もちつきのときにもきて、こえをかけてくれたりしたことがあります。ぼくがてをふると、えがおでふりかえしてくれました。

そのときも、なんだかぼくは、あたたかいきもちになりました。

ぼくは一ねんせいになってから、ペットボトルキャップをあつめてがっこうにわたすこともしています。さいしよは、あねがやっついて、なぜやっているのかきくと、

「ペットボトルキャップをたくさんあつめると、ワクチンになり、いのちをすくうことができるんだよ。」

と、おしえてもらい、ぼくもはじめるようになりました。ペットボトルキャップ400こでじゅうえん。ポリオワクチンひとりぶんは、にじゅうえん。キャップ800こで、こどもひとりのいのちがすくえるとしりました。

すててしまうごみが、ワクチンになって、それでたすかるひとがいるとして、ぼくはとてもおどろきましました。そして、すてるのではなく、あつめたいとおもいました。

「ふくし」ってかんがえたときに、すごくむずかしそうだとおもったけれど、そのひとがそのひとらしくくらしにいけるように、ひとりひとりがじぶんのきもちをたいせつにして、えがおやあたたかいきもちをひ

ろげていくことだとおもいました。

みんながえがおになれるように、こまっているひとがいたら、ぼくもじぶんにできることをかんがえて、やさしいきもちで、おうえんしたりてつだったりしていきたいです。

## はじめての手話

犬伏東小学校 二年

芦澤

樹

ぼくは、休みの日に家ぞくでカフエに行きました。ぼくたちのじゅんぼんになったのにおかあさんがなにもちゅう文しません。ぼくはふじぎに思つて、おかあさんをのぞきこみました。おかあさんはなにもしゃべらずに、メニユーひょうをゆびさしていました。ぼくは、なんでいつもみたいになちゅう文しないのかなと思つて、おかあさんとてんいんさんをよく見てみました。おかあさんがメニユーをゆびさすたびに、てんいんさんはグッドのポーズをしていました。そして、ちゅうもんがおわるとおかあさんは、へんなポーズをしました。左手に右手をのせて右手をちよんと上に上げるポーズです。するとてんいんさんも同じポーズをしてくれて、二人はともうれしそうにえがおでした。ぼく

はなにも話さなかったのにきちんとちゅう文ができたのかふあんになりました。そして、てんいんさんとしたへんなポーズはなんだったのか気になりました。

ぼくはおかあさんに、

「さつきはなんでしゃべらなかったの？二人でなんのポーズしてたの？」

と聞きました。するとおかあさんは、

「さつきのてんいんさんは耳のふじゆうな人だったのよ。メニユーをゆびさしてちゅう文してください。ってメニユーひょうに書いてあったの。さいこのポーズは手話でありがとうといういいみなんだよ。」

と教えてくれました。

ぼくは、はじめて手話を見ました。ようちえんのときに手話をしながらうたをうたったことはありました。でも、ぼくはただのふりつけだと思っていました。手のうごきだけで人と話ができるとは思いませんでした。ぼくも手話をやってみたいと思い、おかあさんに手話を教えてもらうことにしました。おかあさんは「ありがとう」「すき」「きらい」「元気」「うれしい」などの知っている手話を教えてくれました。また知りたいと思ひ、ぼくはまずじ分の名前をしらべてみまし

た。あ、い、う、とそれぞれにゆび文字があつてじ分の名前をおぼえるだけでもとてもむずかしかったです。でも、いつきのきはキツネの形でおもしろかったです。

ぼくが車にのっているときに、ほちようきをつかっている人を見たことがあります。ほちようきをつかうと、手話をつかわなくても人と話をする事ができるので、耳のふじゆうな人は、たくさんいるんだと思います。ぼくはそんな人たちと会ったときに、手話で話がしたいと思いました。そのときのために手話をもっとたくさんおぼえたいです。

テレビのニュースでも手話でつうやくをしている人がいて、すごいなと思います。こんど図書かんで手話の本をかりてべんきようをしたいです。そしてぼくもいつか手話をつかつてえがおで話がしてみたいです。

## ユニバーサルデザインとは

犬伏東小学校

三年

大矢

湊

みなさんは、ふくしにかかわる「ユニバーサルデザイン」という言葉を耳にしたことがありますか。ぼくはその言葉を耳にしたことはありませんが、その意味をよく理かいしていませんでした。そこで、なぜそう

いったデザインがあるのかを調べてみました。「ユニバーサルデザイン」とは、「すべての人のためのデザイン」という意味です。特定の人たちのバリア（しょうがい、ふべんなど）をとりのぞく「バリアフリー」の考え方をさらに進め、もう力や年れい、国せき、せいべつなどのちがいをこえて、すべての人がくらしやすいように、まちづくり、ものづくり、かんきょうづくりなどを行っていかうとする考え方です。

ぼくがえきの中で、電車にのるために、かいだんを上ろうとしたときのことです。かいだんの近くにはエレベーターがあり、そこに車イスにのっている人を見かけました。その人は、車イスにすわったまま、かんとんにボタンをおして、エレベーターにのっています。ぼくは、なぜそんなに早くエレベーターにのれるのか、ぎもんに思い、そのエレベーターのボタンをかんさつしてみました。すると、そのボタンは、すわったままの人や、ぼくのようなこどももおせるように、ひくいいちにつくられており、『車イスマーク』がついていました。また、ボタンの近くには、さわってみるとボコボコとした『点字』とよばれているものがありました。そういった工夫によって、車イスにのった人、ぼくたちのようなこども、目が見えない人な

どが、かいてきにエレベーターにのることができると、だと気付くことができました。他にも、調べてみると、身近なところに、ユニバーサルデザインがとりいれられていくものが多くあることがわかりました。たとえば、自分の力でドアを開閉するひつようがない『自動ドア』、トイレの男性、女性マーク、出口を示すマークなどに用いられる、文字を知らなくてもその意味を理かいてできる『ピクトグラム』、音声や鳥の鳴き声、音楽などで青信号に変わったことを知らせる『音きよう式信号き』などがあげられます。また、令和六年から新しくなった紙へいにも、デコボコがついたしき別マークが入っており、より短時間でさわるだけでお札かが分かるユニバーサルデザインが用いられています。このように、ぼくが意しきしていなかつただけで、世の中には多くの「ユニバーサルデザイン」が取り入れられていることがわかりました。これらがつくられたはいけいには、「すべての人がしあわせに生きたい」というふくしの考えがあつたのだと思います。その考えを大切にするために、ぼくも、さまざまな人の立場に立って、いろんなものを注意深くかんさつし、ちよつとしたことに気付けるような人を目指していきたいです。

## ぼくのひいおばあちゃん

あそ野学園義務教育学校 三年 矢古宇 陽敬

ぼくのひいおばあちゃんは、にん知しようというびよう気になってしまいました。にん知しようは、物をわすれたり、人をわすれたり、いろいろな事をわすれてしまうびよう気です。ぼくは、ひいおばあちゃんがにん知しようになるまで、このびよう気の手を知らませんでした。

ひいおばあちゃんは、ぼくが会いに行くといつもよろこんでくれました。いっしょに、電車を見たり、手遊びをしたりボール投げをしたりたくさんお話をしたりしていました。小さいころの記おくはないですが、お母さんが、ぼくとひいおばあちゃんのしゃしんや動画をとっておいてくれました。

にん知しようになってからは、少しひいおばあちゃんがかわってしまったように感じました。何回も同じ話をしたり、同じしつ問をしたり、昔の話を何回も教えてくれる時がありました。ぼくや家ぞくの名前をまちがえたり、夜にさんぽに行ってしまったたり、いつものひいおばあちゃんではないちがうひいおばあちゃん

んになってしまいました。そしてこのにん知しようというびよう気は、なおることがないそうです。ぼくは、悲しい気持ちになりました。けれどかわってない事もありました。それは、ぼくが会いに行くとうれしうにしてくれる事です。本当はぼくの事をわすれてないのかなって思うくらいうれしうにしてください。

今、ひいおばあちゃんはしせつという所でくわしています。にん知しようの人は、夜にさんぽに行つてしまつたり、火のけしわすれがあつたり、一日中見えないといのちのきけんがあるので手助けがひつようです。しせつの方はたくさん手助けをしてくださり、ぼくも困つた人がいたときは手助けをしてあげたいと思いました。

そしてぼくが今ひいおばあちゃんにできる事を考えました。それは今のひいおばあちゃんをりかいしてあげる事、え顔で話をする事です。同じ話をしてしまつても、同じしつ問をしてしまつても、やさしく答えてあげたらひいおばあちゃんは、うれしいのかと思います。

にん知しようというびよう気は、だれにでもおこりうるびよう気で、だれもなりたくてなっているわけではありません。もしかしたら自分もなつてしまふかも

しれません。その時に、やさしくしてもらったり手をさしのべてくれる人がいたらうれしいし心強いと思います。びょう気の人や困っている人がいたら、どんなふうにせつしてもらえたらうれしいか、ひいおばあちゃんを通して考える事ができました。

ひいおばあちゃんがぼくの事をわすれてしまっても、ぼくはずっとひいおばあちゃんの事をわすれないよ。

## みんなで食べよう子ども食堂

城北小学校 四年 高瀬<sup>たかせ</sup> 晴<sup>はる</sup>

ぼくは、学校が好きだ。なぜなら、友達と遊ぶことができるからだ。そして、何より給食がとてもおいしいからだ。ぼくの大好物のあげパンは、さとうがあまりくてパンがふわふわ。いつも友達とおなかいっぱい食べる事ができる給食が大好きだ。

夏休みに入って、ぼくの昼食事情は大きく変わってしまった。ぼくの家は、父と母が二人とも外で働いている。ぼくは、母が仕事に行く前に作ってくれたおべん当をお昼に食べている。おべん当もおいしいが、給食と比べると何か物足りない。理由を考えてみると、まずは温度だ。給食では温かいものを食べる事がで

きる。そして、一番のちがいは一人で食べるということだ。給食は友達と楽しく食べている。おいしく食べるためには味だけでなく、「どんなかんきょうで食べるか」が大切だと思った。そう気付いたとき、子ども食堂についてのテレビCMを見た。多くの人が集まって、おいしそうに食べているのを見て、どんな場所なのかきょう味がわいてきた。

子ども食堂とは、ボランティアだん体や地いきの人たちが主体となって運営している食堂である。子どもにご飯を食べさせてくれるだけでなく、一人で食事をする「孤食」をへらすために温かいふん囲気の中で食事をする機会を作っている。また、子どもだけでなく大人も参加できるので、世代をこえた交流の場にもなる。ぼくも夏休み中の昼食は孤食だと気付いた。だからぼくも子ども食堂に行ってみることにした。

今回は「地いき型こども食堂ちよこつと」に行ってきた。外では大人も子どもも楽しそうに話しながら流しそうめんのじゅんびをしていた。ぼくはきんちようしていたが、その様子を見て少し安心した。室内には子どもだけでなく大人や高れい者、赤ちゃんもいて、様々な年れいの人が集まれる場所だと分かった。お昼ご飯は、流しそうめんの他にも天ぷらやおにぎり、ゴ

ーヤのサラダ、かぼちゃの物、なしなどたくさん料理があつた。これらの材料は、近くの農家の方やボランティアの人が持ってきて、調理してくれたものだ。初めての場所で仲良くできるか心配だったが、流しそうめんやすいかわりでは、みんながおうえんしてくれて、多くの人と仲良くなれてうれしかった。何より、みんなと食べたご飯は最高においしかった。食後はおにごっこをしたり水遊びをしたり、楽しい時間を過ごして幸せな気分になった。

子ども食堂は特別な理由がなくても気軽に利用できる場所だ。そして、この場所があるのは子どもたちのことを考えてくれるボランティアや、き付をしてくれる人たちのおかげだと感じた。いろいろな世代の人や友達と交流の輪を広げながら食事ができるこの場所が、もつともつと広がり、多くの人が幸せになれるといいと思った。

## 福祉サービスの大切さ

赤見小学校 六年 田村 優衣

私の弟は放課後等デイサービスに通っています。放課後等デイサービスとは、障がいのある子供に対して

様々な支えんを行う場所で、佐野市内にもたくさんあります。私の弟は、すぐに泣いたり怒ったりしてしまいます。そのため、放課後等デイサービスで気持ちのコントロール方法を学んだり、いろいろな経験をしたりして、できることや分かることを増やしています。弟は放課後等デイサービスに行くことを、いつもとても楽しみにしているようです。

他にも、児童発達支えん、保育所等訪問支えんや、計画相談支えんなど、いろいろな福祉サービスがあります。障がいのある子供だけではなく、その家族への支えんもあります。私の母は、保護者勉強会などにも参加し、様々な講師の方や福祉職員の方から情報を聞いたり、アドバイスをしてもらったりしているそうです。母はこの支えんをとっても心強いと思っっているそうです。支えんがたくさんあることについて、私はとてもいいことだと思います。なぜなら、障がいのある人と家族が安心して生活できるようになると思うからです。

弟は苦手なことが多いです。けれども、得意なこともあります。それは、目で見て覚えることと、がんばろうと決めたことは最後までがんばれることと、好きなことへの集中力があることです。母から、環境を整

えてあげることが大切だと教わりました。そこで家中の環境を整えたら、一人でできることが増えました。例えば、絵カードを使って朝にやることを表してあげると、一人で朝の支度ができるようになります。少し手助けをしてあげること、安心して活動ができるようになります。他にも、カレンダーに予定を書くことで、いつ何があるのか分かるようにしたり安心できるものを近くに置いておいたりすると、落ちついていられます。ほめてあげることがとてもいいことだと教わったので、がんばったりいいことをしたりしたらほめてあげると、とても喜びます。また、できたところには花丸を書いてあげること、 「よし、またがんばろう。」と思うので集中することができるようになります。

弟ががんばろうとしているすがたを見て、私は、「人一倍大変なのに一人でできることが前より増えていてすごいな。」と思いました。それは、まちがいなく福祉サービスのおかげだと、福祉の大切さを知りました。また、障がいのある人とその家族が安心できるように、私ができることをサポートしたいと思いました。そして、少しずつ時間をかけて弟の苦手を得意に、きらいを好きにしてあげられるようにしたいです。私

は他の人よりも障がいについて知っているので、弟がこまっているのを見かけたら手伝ってあげたいです。また、障がいをみんなに知ってもらうことで、おたがいに暮らしやすい社会にしていきたいです。

### これから祖母と暮らしていく上で

田沼小学校 六年 塩島しおじま 陽咲ひさき

私は、足が不自由な祖母といっしょに暮らしています。祖母は家の中の動きがゆつくりです。また段差の上り下りが大変なので、階段を使うことも難しいです。そのため、二階に上がることができません。しかし、日常生活の中で、自分でできることは、しっかりと自分でやることでできていたので、それほど気にはかけず、いっしょに仲良く暮らしていました。

そんな祖母が、夏休み中に体調をくずし、寝込んでしまいました。元気に過ごしていた祖母が急に弱ってしまった姿を見て、私は大変心配になりました。そこで私は兄に相談をして、日中、仕事に行ってしまった母の代わりに、兄と協力して、祖母の手助けをしようと思いました。

例えば、トイレに行く時です。祖母はベッドから立

ち上がるまでの間、近くに置いてあるつえを自分の所に用意して、慎重に立ち上がります。そして、一歩一歩ゆっくり歩き始めます。トイレに着いてからも、ぶつからないようにゆっくり動く姿が見られました。足が丈夫な私たちなら、すんなり立ち上がることができのですが、この様子を見て、トイレに行くことがとても大変なのだなど見守っていて分かりました。もしもの時に備えて、そばで見守ることが大切だと思いました。

また、私は祖母の姿を見ていて、自分に何かできることはないかを考えました。それは、私が祖母の気持ちを聞いて、何かやってほしいことはないかを紙に書いたところ、祖母は、うれしそうに私にしてほしいことを口に出して、答えてくれました。私は、祖母の気持ちに答えることができて、とてもうれしくなりました。それと同時に、祖母のように高れい者や身体が不自由な人にとって、助けてくれる人や支えになってくれる人が近くにいるということがどんなに心強いのか、祖母の様子を見て、分かったような気がしました。

これから先の時代は、私たち若い世代が何人もの高れい者を支えなくてはなりません。私は、高れい者を

助ける人たちが増える世の中になってほしいと心から思っています。そのために、私が祖母と接する中で、気付いたように、高れい者の方とたくさん交流をして、気持ちを聞いてあげること、理解を深めることが大切だと思いました。学校の総合的な学習の時間でも、車いす体験、手話体験、点字体験など、様々な体験をしてきましたが、それが今回のことにつながっているのではないかと感じました。

大きなことをやることは難しいかもしれませんが、自分の気持ちを大切にし、勇気を出して一歩ずつ前にふみ出して、行動していきたいと思えます。

## やさしさ

葛生義務教育学校 六年 高實子 泰聖

のんびりとした昼下がりでした。ぼくは図書館へ行くために、人通りが少ない道を歩いていました。図書館の少し手前にある横断歩道の前で、ぼくは小さな出来事に出会いました。

歩道を一人で歩くお年寄りを見かけました。その人は白い杖を持って、体を少し丸めて歩いていました。横断歩道の前で信号は青になっていましたが、その人

はなかなか渡ろうとしませんでした。道路の様子を見  
てみると、車が完全に止まっていなかつたり、スピー  
ドを落としていなかったりしていました。このまま渡  
ると危ないと思つたのかもしれない。その時、向こ  
う側から来た中年の女性がその人に近づき、

「一緒に渡りましょうか。」

と声をかけました。お年寄りの方はほつとしたような  
顔でうなずき、二人でゆっくりと横断歩道を渡ってい  
きました。すると、スピードを上げて走っていた車も、  
しつかり止まっていました。わたしはそれを見て、は  
つとしました。たつた数秒の出来事でしたが、「誰か  
の少しの勇気が、誰かの安心になる」ことに気付いた  
からです。横断歩道は、ふだん何気なく渡っている場  
所ですが、全ての人が同じように安全に感じるとは限  
らないのだと思いました。あとで調べてみると、横断  
歩道での交通事故、車が止まってくれないことで渡れ  
ない高齢者や障がいのある人が多くいることを知りま  
した。点字ブロックがあつても、信号の音が聞こえに  
くかつたり、車が止まらなかつたりすると、とても危  
ないのです。

「福祉」という言葉は、ぼくにとってむずかしい言  
葉でした。でも、この時のことを思い出すと、福祉と

は、誰かが安心して行動できるように気付いて、助け  
ることだと思えます。それは、専門の人や大人だけが  
やるものではありません。困っている人がいたら声をか  
ける。自分は何気なくしていることでも、大変に感じ  
ている人がいるかもしれないと考える。そんな小さな  
行動や気持ちをもつことは、ぼくのような子どもでも  
できるはずです。

困っている人がいるかもと気付くことが最初の一步  
です。そして、その気付きを行動に変える勇気が、周  
りの人にやさしさを広げ、社会全体をやさしくしてい  
くのだと思えます。もし、自分が声をかけることがで  
きなくても、近くにいる大人に伝えられれば、りっぱ  
な助けになるのです。

行動することで周りの人も「自分でもできるかも」  
と思えるようになるかもしれません。一人のやさしさ  
が、もう一人のやさしさを生み出し、それがつながつ  
て、町や社会の空気が少しずつやわらかくなっていく  
気がします。

今後、横断歩道の前に立った時、ぼくはきっと今日  
のことを思い出します。そして誰かが安心して渡れる  
よう少しでも勇気を出して声を掛けたり行動したりし  
ていきたいです。

# 優 秀 賞

(中学生の部)

## 色覚障がい

西中学校

一年

藤波 ふしなみ

丈士郎 じょうじろう

僕には障がいがあります。先天性色覚異常というものです。色の見え方が他の人と異なってしまうので。眼科で色覚検査をしたとき、自分に色覚異常があると知りました。その時「僕は障がいをもっていったんだ。みんなと違っていったんだ。」とショックを受けました。色覚異常があることで、困ったことがいくつもあります。例えば学校の美術の授業で色をぬる際、「みんなと見えている色が違うからどんな色でぬればいんだろう。」となかなか色が決められず、困ってしまふことがあります。しかし、そんなときには友達に「この色で合ってる？」と聞くと、友達は優しくどんな色でぬればいいかを教えてくれます。このように僕は、周りの人に恵まれているおかげで、色覚異常をあまり気にせず過ごせることができていて、とても感謝しています。

この世の中には、障がいを持っている人が多くいま

す。そして、その人たちを否定する人もいます。僕は、差別は良くないことだと教わってきました。しかし、日本中の人がこのように教えてもらっているのに差別はなくなりません。

わざと差別をする人もいれば、その言動が差別になるとは知らずに相手を傷つけている人もいます。僕も傷つくようなことを言われたことがあります。その時にはとても悲しい思いをしたのを覚えています。少しの思いやりのない言動によって、人は傷ついてしまいます。ですから、世の中には様々な障がいを抱える人がいることを知り、いたわりの気持ちで周囲に接することが大切です。

僕は自分の障がい分かるまで、パイロットになることを夢みていました。しかし、検査を受けたとき、この障がいがあるとパイロットになることはとても難しいと言われました。「なんで自分がこんな障がいをもっているんだ。」という気持ちが込みあげ、周りの人がうらやましくなりました。しかし、世の中には僕よりもつらい思いをしている人がたくさんいて、それに負けずに生きています。それを考えて、これからも困難も乗り越えていこうと思います。

このことを書いていて、あらためて自分の障がいに

ついで考え、向き合うことができました。障がいのある人が身体的な理由で周りとの差がついてしまうことにはある程度しかたないことだと思えます。しかし、障がい理由にいいじめや差別などで傷ついてしまうことはなくせるはずです。多くの人が相手の立ち場を考えて行動できるようになればよいと思えます。

この世界に生きる人は平等に、幸せに生きる権利をもっています。一人一人の人権が守られたなら、誰もが生きやすいさらに楽しい社会になると思えます。

## 寄り添う心

赤見中学校 一年 長沢<sup>ながさわ</sup> 莉望<sup>りの</sup>

私は以前、小学校の福祉の授業で「車椅子体験」、「点字体験」、「手話体験」をしました。それまでは「福祉」と聞くと、特別な人が行う特別な支援だと思っていました。でも実際に体験してみると、福祉はもっと身近で、誰かに寄り添う気持ちから始まるものだと気づくことができました。

まず車椅子体験では、まっすぐなところは間違いないく進めるものの、ほんの僅かな階段や狭い道に差しかかると、一人では前に進めなくなってしまうました。

そのとき、友達が「押そうか？」と声をかけてくれた瞬間、とても安心し、支えられることのありがたさを強く感じました。この体験を通して、助けるために特別な力が必要なく「気付いて声をかける」ことこそが福祉の始まりなのだと思います。

また点字体験では、文字が見えないということがどれほど不安なのかということに気づき、点字がどれほど大切な伝達手段なのかを実感しました。一つ一つ丁寧に打ち、完成した点字を指でなぞったとき、初めて「伝わることの喜び」を知ることができました。目の不自由な人にとって、点字はただの文字ではなく自分と世界をつなぐ大切な声なのだと思います。

さらに手話体験では、聴覚障害をもった方と手話で会話をする機会がありました。最初は緊張して手がうまく動かせませんでした。相手の目を見てゆっくり丁寧に伝えることを意識すると、相手の方も微笑んでくださり、気持ちがあつた瞬間を感じました。声を出さなくても、伝えようとする心があれば相手に届くこともあるとわかりました。

これらの体験を通して、「福祉」は特別な人がする特別なことではなく、自分にもできることだと思えました。例えば、困っている人に「大丈夫ですか？」と

声をかけること。点字ブロックの上に立たないようにすること。そんな小さな気づきや行動こそが、相手に寄り添う福祉の始まりだと思えます。普段の生活でも、友達が困っているときに声をかけたり、荷物を持っていてる人に「手伝おうか？」と勇気をもって言ったりすることも大切だと感じました。福祉は特別な場所だけで行うものではなく、学校や地域社会の中でも広げていけるものなのです。

今回の経験を通して、福祉は誰かを「助ける」、「支える」というだけでなく、「相手に寄り添う心」をもつことから始まるのだということを学びました。私はこれから、困っている人を見かけたら自分から声をかけたり、周りの人の困りごとに気づいたりできる人になりたいです。大きなことはできなくても、身近なところから自分ができる福祉を続けていきたいと思えます。相手に寄り添う心を大切にしながら。



## 幸せな社会を目指して

### マイ・チャレンジ職場体験を通して

赤見中学校 二年 星野<sup>ほしの</sup> いちか

私は六月に佐野市民病院でマイ・チャレンジ職場体験学習を行いました。そこにはたくさんの方が入院していて、特にお年寄りの方が多かったです。マイ・チャレンジの二日目。私は入院しているお年寄りの方の看護をしました。一人で起きられなかったり、耳が遠かったりなど、様々な症状の方がいました。私はその患者さんをベッドから車椅子に寄せ、食堂へ移動するお手伝いをしました。患者さんの体を支えて車椅子に乗せるのはとても難しかったです。また車椅子を押す力加減やスピードにも苦戦しました。

マイ・チャレンジでのこの経験から、車椅子の方たちは普段どのように生活をしたり、移動をしたりしているのか気になったので調べてみることにしました。

まず、車椅子の方の生活について調べました。家では車椅子での移動がスムーズにできるよう、家具の配置などを考慮する必要があります。また、座ったまま調理や洗濯などができるような工夫をしたり、よく使

うものは取り出しやすいように、低い位置に収納したりするなどの工夫が必要になります。さらに、外出時には、段差や階段、狭い道など、車椅子での移動が困難な場所が多いなどバリアフリーの問題もあるそうです。他にも多目的トイレの整備が必要などところも多いそうです。

次に、学校内について調べてみたところ、私が通っている学校には、足が不自由な人のために自動の昇降機が設置されていたり、昇降口や体育館の入口にスロープや手すりが施工されていたりするなど、たくさん工夫がなされていることを改めて感じました。

私が調べたうえで一番大切だと思ったことは周囲の協力です。家族や友人だけではなく地域の人々が理解を示して協力すること、適切な配慮をすることが、車椅子生活者の大きな支えになることがわかりました。私の住む町は地域の交流が盛んなので、高齢者や障害がある方でも住みやすい町だと思います。しかし都会では地域社会の交流が少ないという問題もあります。同じ日本でも地域格差があるという現状を改善する必要があるのです。

この夏、私はニュージーランドにホームステイに行きます。この機会を利用して、海外の福祉についても

ぜひ学んできたいと考えています。そして海外のよい点を日本に取り入れるにはどうしたらよいのかを考えるきっかけにしたいです。

私の将来の夢は、看護師になることです。マイ・チャレンジ職場体験学習で「看護師という仕事は、常に患者さんのことを思い、よりよくしていこうと考える続けることが大切だ」と教えていただきました。この言葉を胸に福祉について考え続け、すべての人が幸せに生きる社会を目指したいです。



## 障がいのある人も同じ人間

西中学校 三年 鴛海おしうみ 柚璃ゆうり

私は、なぜ障がいのある人が差別されるのかについて、疑問に思っています。障がいのある人は、変わっていて何を考えているか分からない、自分たちとは違うから関わらないほうがいい、私にうつる病気なのかも、という偏見に囚われている人も多いと思います。

私もそのような偏見をもっていました。しかし、あることがきっかけでその偏見を捨て、新たな考えで障がいのある人と接することができるようになりました。そのきっかけは三つあります。

一つ目は、私の弟が軽度の発達障害をもっていることです。弟は不安なことがあるとパニックを起こしてしまうことがあります。そのため、小学校では特別支援学級で授業を受けていました。それを知り、私の弟は普通ではないのかと思いました。私はどのように弟と接すればよいのかと考え、母に聞いてみました。すると母は、「そんなに重く考えず、今までどおり普通に接すれば大丈夫」と言ってくれました。私は、弟も私たちと同じ人間なのだから、普通の子と同じように

接すれば良いのだと学びました。その言葉をきっかけに障がいのある人への考え方が変わりました。

二つ目は、ある本との出会いがきっかけでした。その本は、「僕は上手にしゃべれない」という本です。図書館で、その本の題名が急に飛び込んできました。その本は「吃音」という障がいをもつ子の物語です。私は初めて吃音という障がいについて知りました。そして、言葉に関する障がいについて調べました。失語症や、発声障害、場面緘黙などというこれまで知らなかった言語障害があることが分かり、理解が深まりました。

三つ目はボランティア活動に参加したことです。私は先日、友達と一緒に、障がいのある人が参加する祭りの運営を手伝いました。その際、お客さんのほとんどが障がいのある大人でした。そこで友達から、「どうやって接したらいいのかな。」と言われました。私はこれまでの経験から、すかさず、「普通に接して大丈夫だよ。」と言いました。友達にそう言えたことで、その日の活動は自信をもって行うことができました。私はこれらのことをきっかけに、障がいのある人に対して偏見がなくなり、関わり方を改めることができました。障がいのある人は、なりたくてそうなってい

るわけではありません。だから、自分とは違うなどという理由で差別してはいけません。一人一人が見方を変えて、平等に接することで差別をなくすことができると思います。今、私にできることは、ボランティアに参加して障がいのある人と接して、様々な障がいについて理解を深めること、周りの人に自分が知ったことを伝え広めることなどです。このことを実践し、誰に対しても平等な心を大切に生活していきます。



## 「地域を家族に」

葛生義務教育学校

九年

廣瀬

友香

以前、私は認知症の高齢者施設を見学する機会があった。職員の人たちが優しい言葉で声をかけ、手際よくお世話をする姿を見て、私はとても感心した。施設には、二十四時間見守りをする職員がおり、緊急時には医療機関とも連携がとれる体制になっている。それを聞いて、入居者は、安全・安心に暮らすことができ

る。また入居者の家族も安心して施設に預けることができる。そう思った。ただ入居者の方を見ると、どことなく暗く元気のない印象をもったことを覚えている。「高齢で認知症があると皆こうなるのかな。」その時、私はそう思った。

また別の日に、自分の家の近くで倒れていたおばあさんを近所の人が助けている場面に遭遇した。おばあさんは怪我をしていたが、

「大丈夫だよ。」

と言って、ニコニコ笑っていた。近所の方々は、怪我の手当をしたり、どこのおばあさんか確認したりする作業を手分けして行っていた。おばあさんは認知症のようで、過去にも同じようなことがあったのか、衣類に住所・名前・連絡先が書いてあった。その後、家族とも連絡がとれて、無事に家に帰っていった。怪我も軽傷で済んだと聞いて、近所の人も皆ほつとしていた。聞けば、新しい家に引っ越したばかりで、おそらく元の家に間違えて戻ろうとしたのだろうとの話だった。後日、たまたま通りかかった道端の畑で、家族と一緒に畑仕事をするおばあさんを見かけた。あの時と同じで、ニコニコと笑いながら畑仕事をして、いきいきと楽しそうに生活を送っているように見えて、私も

嬉しくなった。

この二つの体験は、私に認知症の高齢者の方は、施設と自宅、どちらで過ごした方が良いのか考えさせられる機会となった。施設にいれば、認知症の方本人と家族、両方とも安心できる暮らしが送れる。しかし、その反面、そこにはあまり自由がない。入所した方は、自分の意志で入所したのだろうか。本当は家にいたくて、ほとんど施設の中だけの生活に満足していないのではないか。正直、そういった疑念を抱いてしまう。家で生活すれば、家族は、二十四時間見守っているわけにはいかず、身の周りの世話も大変であり、危険も伴う。だが本人は住み慣れた家で、ある程度自由に生活を送ることができる。認知症のある高齢者にとって、どちらが幸せなのだろうか。

私は、今回のように地域全体が家族のような存在になり、見守ってくれれば、施設での生活に比べて認知症の方も自分らしく自宅で生活が送れるのではないか。その方が良いのでは・・・と考える。それにはやはり普段からの、地域との繋がりが大事だと思う。人と人との繋がりが薄れている現代ではあるが、

「地域を家族に。」

そう思わせてくれる体験だった。



佳

作

(題名・学校名・学年・氏名)

福祉作文 佳作（小学生の部）

やさしかったひいおばあちゃん  
読書バリアフリー  
ぼくのまわりのふくし  
めざせ、ゆう気あるわたし  
わたしの近くの人のふくし  
大すきなおばあちゃん  
あいさつは福祉だ  
身近にあるユニバーサルデザイン  
ふくしについて  
ほ助犬について  
障がい者にとって生活しやすいこと  
わたしが見つけた福祉  
「ぼくのおじいちゃん」  
福祉が縮めてくれた距離  
一人一人のあたりまえ  
わたしにできること  
福祉が教えてくれたこと  
私にできること

犬伏 小一年 武井 琥太郎	佐野 小二年 小暮 ひより	界 小二年 高野 莉史	城北 小二年 高島 朱莉	田沼 小二年 岩上 結彩	栃本 小二年 腰高 央采	城北 小三年 木村 碧那	佐野 小四年 太田 朱音	植野 小四年 横山 ゆい	犬伏 小四年 大室 夢叶	吾妻 小四年 原島 菜乃葉	赤見 小四年 今野 愛梨	旗川 小五年 越沼 翔太	佐野 小六年 櫻木 そら	天明 小六年 魚谷 結生	城北 小六年 糸谷 美里	石塚 小六年 内田 悠太	栃本 小六年 山田 伽羅
---------------	---------------	-------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	---------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------

福祉作文 佳作（中学生の部）

たった一度のあいさつで  
改めて気付いた思いやりの形  
助け合いの心  
大切なもの  
ありがとう。大好き。  
祖父との思い出から  
支え  
音楽がつなぐ心の絆  
あなたが見る笑顔

城東 中一年 福田 陽愛里	田沼 東中一年 湯澤 希愛	あそ野 義七年 新川 由翔	葛生 義七年 赤石 龍音	佐日 中一年 高野 茉耶	あそ野 義八年 峰崎 彩	佐日 中二年 高山 菜月	佐日 中三年 関口 未桃	佐高 附中三年 磯貝 悠
---------------	---------------	---------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------



令和7年度 児童・生徒福祉作文作品集

「青 空」

発行日 令和8年2月1日

発行者 社会福祉法人 佐野市社会福祉協議会

この作品集は、赤い羽根共同募金の寄付によって作られています。